山崎合戦

菊池寛

青空文庫

明智光秀は、信長の将校中、第一のインテリだった。学問もあり、武道も心得ている。戦術も上手だし、築城術にも通じている。そして、武将としての品位と体面とを保つ事を心がけている。

それだけに、勿体ぶったもっともらしい顔をして居り、偽善家らしくも見えたのであろう。リアリストで、率直を愛する信長は光秀がすまし過ぎているので、「おい！　すますない！」と云って時々は肩の一つもつつきたくなるような男であったのであろう。

神経質で陰気で、条理も心得て居り、信長のやり方を腹の中では、充分批判しながら、しかしすまして、勿体ぶった顔をしている光秀は、信長には何となく、気になる、虫の好かない所があったのだろう。

と、云ってガッチリしているのだから、役には立つし、軍役や雑役に使ってソツがないので、だんだん重用しながらも、信長としては、ときどきそのアラを探して、やっつけて見たくなるような男であったに違いない。

信長は、人を褒賞したり抜擢したりする点で、決して物吝しみする男ではないが、しかしそのあまりに率直な自信のある行動が自分の知らぬ裡に、人の恨みを買うように出来ている。浅井長政なと、可なり優遇して娘婿にしたのにも拘わらず、朝倉征伐に行ったときその背後で背かれた。例の金ヶ崎の退陣で、さんざんな目に会った。

「浅井が不足を感ずるわけはないが」

と云って、信長は浅井の反逆の報を容易に信じなかった。しかし、自分が恨まれないつもりで、恨まれている所に、信長の性格的欠陥があったのであろう。

荒木村重なども、やはりそうである。村重と始めて会った時、壮士なら之を喰らえと云って、剣尖に餅か何かをさして、之をさしつけた。村重平然として、口ずから喰ったと云うが、後で考えればひどい事をする奴だと思ったに違いない。村重なども、相当重用しながら背かれている。松永久秀などもそうである。

光秀反逆の原因は、丹波の波多野兄弟を、光秀が、命は請け合ったと云って降服帰順させたのを、信長が殺してしまった事。家康が安土に来るとき、光秀に饗応の役をさせた所、あまりに鄭重に過ぎたので信長が怒って途中で止めさせた事。森蘭丸が信長に近江にある亡父の旧領がほしいと哀願したところ、三年待てと云った。ところがその旧領は、現在光秀の所領なので、三年の裡には、自分の位置が危いことを知って、反逆の意を堅めたと云う説。

その他いろいろあるが、三年待て云々の話は多分嘘だろう。此の頃の信長麾下の武将など、信長勢力の発展と共に、その所領は常にいろいろ変更されているのだから、近江で呉れたものを中国辺で呉れるものと思えば、心配することはないのである。とかく蘭丸と光秀とをいろいろからませている話は、若年にして本能寺で死んだ蘭丸の短生涯を小説化するため、大抵は仕組まれたもので、信長が蘭丸に光秀を折檻させたなども多分嘘である。戦国時代の武将が主君

自らの心安立ての打擲なら、或は辛抱するかも知れないが、小姓などを使って殴られて、寸時も辛抱するわけはないと思う。そんな事があれば、その場で抵抗するか、或は切腹したに違いない。

しかし、光秀が信長に反いたのは、平生の鬱憤を晴すと同時に、あわよくば天下を取ろうとする大志が、あったに違いない。秀吉が、信長の横死を機会に信長の子孫を立てずに自分で天下を取ったのを、光秀はもっと積極的に、自分の私憤を晴すと同時に、天下を志したに違いない。「三日天下」など云う言葉が残っている以上、当時天下の人心は、光秀のそうした大志を知っていたに違いない。京師の地子銭を免除したり相当政治的なことをやった以上、信長を殺せば後は野となれ山となれ的な棄鉢でやった事ではない。

例の愛宕山の連歌で、

ときは今天が下知る五月かな

と云う発句を見ても、天下を狙う大志が躍動しているわけである。老獪なる紹巴は、その時気が付いていたと見え、光秀の敗軍と知るや愛宕山に馳けつけて、知ると云う字を消して、その上に再び知ると、かいて置いた。そして、秀吉に訊問せられた時、「天が下成る」であったのを自分に反感を持つものが、知るに訂正したのであると云った。知るとあるのを消して再び知るとかいた所に紹巴の頭のよさがある。

とにかく光秀の肚は、反逆五分、大志五分であったのであろう。天下を取ることも、必ずし

も空想ではなかった。勝家は北国に、秀吉は中国に、滝川は関東にめいめい敵を控えているのだし、秀吉なども光秀の眼からは、現在我々の考えているような英雄に見えるわけはなく、自分と同輩もしくは以下に見えたであろう。それに、毛利と云う大敵を前に控えて、簡単に攻め上って来るとは思えなかったのだろう。実際柴田などは、グズグズしてなかなかやって来なかった。

秀吉や柴田が、グズグズしている裡に、畿内を経営して、根拠を築き、毛利と誼(よしみ)を通じて秀吉を挟撃して、之を倒せば天下の勢い我に帰すべしと、光秀は思ったに相違なく、そう思ったことをあまり無理だと云えないところもある。その証拠に、堺にいた家康など泡を喰って本国へ逃げ帰っている。これは、光秀の成功が可能に見えた証拠である。

その上、光秀は女婿の細川忠興(ただおき)と親友の筒井順慶など、きっと味方してくれると思ったに違いない。光秀は、順慶の世話は随分焼いていたのだから、そう思うのも当然であった。

また主殺しなどと徳川時代の思想からは大逆と見られているが、戦国時代に主君を殺したものは松永久秀、斎藤道三、宇喜多直家以下沢山いるし、親兄第も、邪魔になると殺しかねない時代であるから、それが名分上の非常な損になるとは思わなかったかも知れない。

とにかく光秀は、私憤を晴すと共に、天下を計ったに違いなく、私憤だけなら、光秀ほどの利口な武将が、どうにか理窟をつけて、辛抱出来ない筈はないのである。

光秀の本能寺襲撃は、物の見事に成功した。信忠まで、二条城で父に殉じた。太田錦城と云

う漢学者は慷慨の士だが、信忠がこんなときに逃げないのは無智の恥を恥じているので犬死だと云っている。義経が、屋島で弱弓を恥じたのも、無智の恥で、武将たるものはそんな事を恥ずるに当らないと云う議論である。

秀吉は、中国に在って、信長の死を聞いて相当あわてた。その第一報は、黒田如水の所へ京都の長谷川宗仁と云うものから飛脚が来たのである。秀吉は、外に洩れるといけないからその飛脚を殺せと云った。如水は、手柄こそあれ殺すべきものにあらずと云って、秀吉に内緒でかくまったと云うが、寛仁な秀吉が、そんな事を云い出すのだから、可なりあわてていたに違いない。

むろん、毛利には兇報を秘密にして、和を講じた。和成った後、兇報を知らして、かくの次第だが追撃をするかどうかと訊いた。毛利の方でも、一寸迷ったが例の小早川隆景、秀吉の大量を知って、此上戦うの不利を説いたので、秀吉後顧の憂いなくして京師に走せ上ることが出来た。その上毛利の旗さしものを借りて、毛利の援兵があるように見せかけることにした。当時秀吉の居城は、姫路である。秀吉麾下の者にとっては、故郷である。だが秀吉は姫路を通るとき、家へ立ち寄るものあらば斬るべしと厳命した。秀吉の軍兵が光秀の予期よりも早く淀川を圧して攻め上って来たのも故あるかなである。本能寺の兇変が、天正十年六月二日で、山崎合戦は同じく十三日である。秀吉の用軍の神速知るべしである。

備中の陣に、兇報が来たとき、黒田如水は秀吉に悔みを云うかわりに、するすると傍へ寄っ

て、その膝を叩き、

「御運の開けさせ給う時節到来せり、よくせさせ給え！」

と云った。秀吉が、心の底で思っていることを、あまり露骨に云ったので秀吉は、生涯如水を信頼しながらも、一味憚るところがあったと云われている。

秀吉だって、信長の死はわが開運のチャンスと思ったに違いない。光秀は、私憤を利用して、無理にそう云うチャンスを作ろうとし、秀吉は、偶然そう云うチャンスが到来したので、信長の死をチャンスだと考える点では、同じであっただろう。

だから、『太閤記』の作者は、

「天下順に帰するや山崎の一戦なり。天下逆に帰するや山崎の一戦なり。順と云ふも至順にあらず、逆と云ふも至逆にあらず、順逆ともに似て非なるものなれども、これを明らかにする鑑なく、これを察らする識なく、英雄一個の心智を以て、四海万姓を弄ぶ事、そも〳〵天の意なるや」となかなかしゃれた事を云っている。

秀吉の軍勢は、二万六千余で、先陣はわが戦国時代のクリスチャン・ゼネラル高山右近であった。第二陣は中川瀬兵衛、第三陣は池田勝入斎だ。

勝入斎は、信長とは乳兄弟なので、その弔合戦に先陣を望んだが、高槻の城主高山右近は、「わが居城は最も京に近い。京近き合戦に、わが鴉の旗見えねば、高山いかにせしかと云われん」とて、先陣を望んで止まないので、到頭その居城の順序に依って、高槻の高山、茨木の中

川、花隈の池田の順になった。

光秀の方は、光秀麾下の雄将斎藤内蔵助が中央軍の先頭で明智十郎左衛門、柴田源左衛門等之につき、四千人。左備は津田与三郎、志水嘉兵衛など三千五百人。右備は伊勢与三郎、藤田伝五郎等二千人である。中央軍の第二陣は、松田太郎左衛門で、その後に光秀旗本五千余騎を従えて、進んだ。

此の中で、左備の津田与三郎は、尼ヶ崎の城主で信長の甥である七郎兵衛信澄の家老だった。この信澄は、信長の弟信行の子で、信行は信長に殺されたのだから、信澄に取って信長は伯父ではあるが父の仇である。その上、信澄の妻は、光秀の娘である。だから、織田の一族ではあるが、本能寺の兇変を聞いて躍り上って悦び、光秀の為に中国から攻め上る秀吉を防ぐつもりでいたが、あまりに早まりすぎて、大阪にいた丹羽五郎左衛門のために殺されてしまった。

織田の一族である信澄が健在で光秀の方に加っていたら、名分の上からも、いくらかごまかしがつくし、殊に此の信澄は軽捷無類の武術があまりうまくなり過ぎて、武術の師匠を冷遇したので、その連中が丹羽方へ内通したと云われるだけに、生きていたら山崎合戦に於ても、さぞかし目ざましい働きをしたに違いない。一国の城主で、織田の一族であるから、光秀に取っては無二の味方になったに違いないのである。信澄が倒れた後でさえ、家老の津田が軍勢を率いて加勢に来ているほどである。

『太閤記』などによると、戦場と時刻を秀吉が光秀に通知したなどあり、芝居の『太閤記』十

段目の「互の勝負は云々」など、これから出ているであらうが、そんな馬鹿なことはない。

が、光秀が山崎の隘路を扼して秀吉の大軍を阻まんとしたのは戦略上、当然の処置であり、秀吉の方も亦山崎に於ての遭遇戦を予期していたのであろう。

山崎で戦うとすれば、大切な要地は天王山である。光秀が之を取れば、随時に秀吉の左翼から、拳下りに弓鉄砲を打ち放して切ってかかることが出来るし、秀吉が之を取れば逆に光秀軍の右翼を脅威することが出来るのである。所謂兵家の争地である。

だから、光秀は十三日の早暁中央軍第二陣の大将松田太郎左衛門に二千人の兵を附して、その占領を命じた。

秀吉も同じく、十三日の早暁堀尾茂助を先ずやり、それでも心もとなく思って、更に堀久太郎をやっている。人数は堀尾、堀二人で四千人である。光秀の方は、丑の中刻で、秀吉の方は丑の上刻であったと云う。丑の上刻と云えば二時半で、中刻は三時だから、三十分違いである。

が、光秀の方が早かったと云う説もある。正確な時計がないのだから、三十分位はどちらが早かったか分るものでない。然し、出立の時刻よりも、天王山に到る道程の関係や、登り道の関係も考えねばならぬ。とにかく、秀吉軍の方が、先きへ天王山の頂上を占領して、後から来る松田政近の軍勢を、追い落した。山崎合戦の勝敗の岐路は、天王山への登山競争にあったわけである。光秀もその戦略眼に於ては、一歩も秀吉に譲らなかったのであるが、天王山の地理などには、光秀の方が、その所領の関係上暗かったかも知れないのである。

光秀は、十三日午前中、全軍を円明寺川畔に展開した。秀吉軍が、展開するのは、ずうっと遅れた。なぜ、光秀が展開を終った隊勢で、まだ隊勢の整わざる前の秀吉軍を打たなかったか、それが一つの敗因であると戦術家は批評している。

戦争開始前、高山右近の家来の甘利八郎太夫と云う男が、牀几に依って戦機の熟するのを待っている右近の前に出て、

「私は、只今どちらにしていいか分らない事があるから、御判断を願いたい。お殿様は、私を無能の人間として、禄など少しも下さっていない。その私が、ここで手柄を現すと、殿様の不明を現わすことになって不忠になる。と云って、臆病な振舞をすると、父祖の名を汚して不孝になる。いずれに致しましょうか」と、三度までくり返して訊いた。皮肉な奴が居たものである。右近心中に怒り、斬り捨てんと思ったが、大事の前の小事であり、かつは年々のクリスチャンであるし、だまっていると、「不忠の名を取るとも、累代の武名を汚すわけには行かぬ」と云って、明智勢に切り入って、一番槍、一番首、二番首の功名を一人でさらってしまった。

戦いは、午後に入って始まった。高山右近は、明智の中央軍斎藤内蔵介に向ったが、相手は明智方第一の剛将なので高山勢さんざんに打ちまかされ、やっと三七信孝、丹羽長秀の応援に依って漸く盛り返すことが出来た。

第二陣の中川瀬兵衛清秀は、光秀軍の右翼伊勢与三郎等の軍に向った。中川は、元荒木村重の被官で、以前此の山崎附近の糠塚で、和田伊賀守と云う剛将を単身で打ち取った剛の者で、

勝手知ったる戦場ではあるし、目ざましい奮戦をつづけて、早くも勝機を作ったのである。光秀は、之より先天王山が、気になったので、並河掃部、溝尾勝兵衛の二人を応援にやったが、既に松田の軍破れ松田は討死して、天王山は全く秀吉の手中に落ちてしまっていた。

秀吉、生駒親正、木村隼人を天王山方面に増援して、横槍についてかからせた。こうなると、光秀の軍は絶えず右翼を脅威せらるることになり、中央軍の奮戦に拘わらず、敗色既に掩いがたきものがあった。

それと同時に、左翼は淀川を頼みにして、配備が手薄であったところ、秀吉の第三軍たる池田勝入斎が川沿いの歩立の小路を発見し、潜行して、光秀軍の左翼たる津田与三郎等の陣に切ってかかった。

光秀が、天王山に関心しながら、淀川の方を気にしなかった事も亦、一つの敗因でなかったかと云われている。

中央軍の斎藤利三父子を初め、左右両翼とも、明智方の将士は、よく奮戦した。関ヶ原当時の西軍などとは比べものにならない。光秀がいかに人士を得ていたかを知るに充分である。

しかし、天王山が秀吉軍に帰し、そのほうから横撃されては、万事すでに去ったと云うべく、それと同時に洞ヶ峠にいた筒井順慶の大軍が裏切りして淀川を渡り、光秀の背後に襲いかかって来た。

順慶は光秀の世話になって居り、無二の親友である。だから順慶自身は、光秀の勧誘に、心

うごいたが、家老杉倉右近、島左近の二人が主人を諫めて出陣せしめず、ただ人数だけを山崎の対岸なる八幡の洞ヶ峠に出した。

そこで、戦争を見物していて、勝った方へ味方しようと云うのである。今から考えれば、秀吉が勝つのだから、秀吉の方へハッキリ附いていた方が、『洞ヶ峠』など云う醜名を後世にまで残さないでよかったのであろうが、順慶の立場は可なり困難な立場であったし、秀吉光秀の勝敗も、後世の我々が考えるように簡単に見通しのつくものではなかったに違いない。後になって、たった四万石の石田三成に二万石で召し抱えられたほどの豪傑、島左近にだって分らなかったのである。

とにかく、後世からはその首鼠両端の態度を嘲笑されているが、しかし当時は明智の無二の親友でありながら、家を全うすることが出来たのは、松倉、島両家老の処置宜しきを得たためであると云われていた。

筒井までが、裏切ったのでは、万事休してしまった。筒井の二心を見ぬいて、明智方でも斎藤大八郎、柴田源左衛門等が備えていたが、こうなっては一たまりもなかった。

先陣の斎藤内蔵介は旗本に合するを得ず、戦場を落ちたが明智方の勇士多く討死した。

光秀は、一旦勝竜寺城に入り、夜の十二時頃に桂川を渡り深草から小栗栖にかかって、土民の手にかかった。物騒千万な世の中で、落人となったが最後、誰に殺されても文句がないのであるし、また所在匪賊のような連中がいて、戦争があるとすぐ落人狩をやり出すのである。本

能寺の変を聴いて堺から伊賀を通って、三河へ帰った家康だって土民のために危かったし、現に家康と同行していた甲斐の旧臣穴山梅雪は土民のためにやられている。

山崎の合戦の時、近隣の連中が陣見舞に酒肴をもたせて光秀の陣に来た。その中に京都の饅頭屋塩瀬三左衛門と云うものも伺候したが、光秀が献上の粽を、笹をとらずに食ったのでびっくりし、これでは、戦争は敗だと思ったと云う。「※粽手に在り」云々の詩がある所以だ。塩瀬と云う菓子屋は、その頃からあったものであるらしい。だが砂糖はやっと当時伝来したものだから、現在のようなおいしい饅頭があったかどうか疑問である。その頃、砂糖入りの菓子を南蛮菓子と云った。今の洋菓子と云うのと同じである。

光秀は、神経質な武将だけに、小胆であろうから、そんな事があったのかも知れない。死ぬ時辞世がある。

順逆無二門
五十五年夢
大道徹心源
覚来帰一心

多分後世の仮作であろうが、光秀も死ぬまで順逆を気にしていただろう。戦争が済んだ時、三七信孝は中川瀬兵衛に近寄って、その戦功をねぎらったが、秀吉は輿に乗っていながら、「瀬兵衛骨折骨折」と云ったので中川は「あいつ、はや天下を取った気でいやがる」とつぶや

いたと云う。

とにかく、光秀としては宿怨を晴らし、たった十一日間にしろ京師に号令したのだから、石田三成に比べると、そう口惜しくはなかったに違いない。

青空文庫情報

底本：「日本合戦譚」文春文庫、文藝春秋社
　　1987（昭和62）年2月10日第1刷発行
※新仮名によると思われるルビの拗音、促音は、小書きしました。
入力：網迫、大野晋、Juki
校正：土屋隆
2009年9月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山崎合戦

菊池寛

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/